

第6学年3組 国語科学習指導案

第2校時 場所 附中体育館 指導者 溝上 剛道

1 単元名 物語の全体像を捉え、ショートムービー『太一のモノログ』を創ろう（「海の命」光村図書6年）

子どもたちは、1学期「カレーライス」を学習材として、二編のエピローグ『ひろしの本音』『お父さんの本音』を作る活動に取り組んだ。一人一人が「わたしの問い」を立て、ひろしとお父さんの立場から心情を捉えていく中で「二人は仲直りできたのか」について考えの違いが生じた。その違いについて話し合う中で「ぴりっとからくて、でもほんのりあまかった。」という象徴表現に立ち止まり、2人の関係の変化を捉え直す姿が見られた。

2学期『やまなし』の作品解説ムービーを作ろうでは、二枚の幻灯を対比的に読んでいく中で、多くの子どもが「五月＝弱肉強食の死の世界」、「十二月＝美しく平和な世界」と捉えていた。しかし、情景描写について問いをもつゆかさんが「五月も美しい」と発言する。そこから再度一人一人が文章に戻り、描写に着目して作品世界を捉え直していった。

本単元は6年生にとって最後の物語単元となる。これまで身に付けてきた「心情の変化」「相互関係」「人物像」等を具体的に想像する力を総動員し、一人一人が「わたしの問い」の解決に取り組む中で生じる考えの違いに立ち止まりながら、物語の全体像を捉え、自分の考えをまとめる力をつけていってほしいと願う。そこで、本単元では『太一のモノログ』（太一が自分の経験を語るショートムービー）という言語活動を核とした単元を構想する。一人一人がよりよい『太一のモノログ』を創るための問いを立て、その解決を通して、言葉による見方・考え方を働かせながら意味の創造へと向かう深い学びを創っていく。

2 単元について

- (1) 本単元では、「海の命」を学習材として取り上げる。登場人物や場面設定、個々の叙述などを基に、その世界や人物像を捉え、物語の全体像を具体的に想像する力の育成をねらう。
本学習材「海の命」は、中心人物太一の成長が描かれた物語である。おとう、与吉じいさ、母、そして瀬の主とのかかわりを通して、太一はさまざまなことを学び、葛藤しながら、村一番の漁師へと成長していく。そうした人物とのかかわりの中で中心人物の考え方が変容していく姿を、それぞれの人物の言動や描写と関連付けながら読んでいくことで、人物の相互関係や心情の変化、人物像などを関連付け、物語の全体像を捉えていくことができる。
各場面の言動や描写に着目し、それらの叙述が、それぞれの人物の立場からどのような意味をもつのかを捉えていく中で、一人一人の子どもが言葉による見方・考え方を働かせ、登場人物の相互関係や心情の変化を具体的に想像するとともに、それらを関連付けて物語の全体像を捉えていけるようにしたい。
- (2) 1学期は「カレーライス」を学習材として登場人物の相互関係や心情の変化を捉える学習、2学期は「やまなし」を学習材として、作品の世界を捉え、自分の考えを形成する学習に取り組んだ。本単元では、「海の命」を学習材として、物語の全体像を具体的に想像する学習に取り組む。この学習が、中学校での2学期の「やまなし」での象徴的な表現に着目して感じたことを表現する学習へとつながっていく。
- (3) 本単元に関する子どもの実態は、次の通りである。（調査人数：35人）
 - ① 登場人物の言動や人物の様子を表す描写を関連付けて、登場人物の相互関係や心情の変化、人物像などを捉え、表現することに難しさを感じる子どもが3名いる。
 - ② 情景描写や比喻表現などの、象徴的な表現に着目し、自分なりにその意味を解釈できる子どもは、全体の4分の1ほどである。

(4) 指導にあたっての留意点は、次の通りである。

- ① 単元の導入では、モノログのある映画やドラマを提示してイメージをもたせた上で、本単元の言語活動「ショートムービー『太一のモノログ』」を提示する。モデルのムービーを見せながら、「物語の全体像」を表現する「これは、僕だけが知っている～についての物語だ。」という語り出しと、その全体像を表す言葉と関連付ける「人物像」のテロップ、「心情」を吹き込む音声等、ムービーの各要素と活用する力を確かめた上で、単元の学習課題を設定する。
- ② 第二次では、「わたしの問い」の解決に取り組みながら、実際に「ショートムービー『太一のモノログ』」を創る活動に取り組みさせていく。その中で、複数の叙述を関連付けたり、心情を表す語彙を問い直したりして「わたしの問い」を発展・更新している子どもを価値づけ、身に付ける力につながる解決策や問いの発展の仕方を共有していく。
- ③ 本時では「村一番の漁師」「本当の一人前の漁師」という言葉に立ち止まっている子どもを取り上げ、その違いを考えていく中で「太一にとって『本当の一人前の漁師』は…だったけど～」のように、太一の考え方の変化を読み取っている発言を取り上げ、前後の言葉の意味を比較したり関連付けたりして中心人物の考え方の変化を捉える思考操作を価値づける。

3 単元の目標

- (1) 語句と語句との関係、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うことができる。
- (2) 物語の全体像を、登場人物の相互関係や心情の変化、人物像と関連付けて、具体的に想像することができる。
- (3) 粘り強く物語の全体像を想像し、学習の見通しをもって、物語に対する思いや考えを伝え合おうとすることができる。

4 指導計画（8時間取り扱い）

学習活動	主体的・対話的で深い学びを生み出すための教師の支援	時間
1 単元の見通しをもつ。	○ 初読で一人一人が捉えた物語の全体像を、モノログの語り出し「これは僕だけが知っている～の物語だ」で表現させ、全体像についての問いを立てられるようにする。 物語の全体像を、人物の相互関係や人物像、心情の変化と関連付けて捉え、ショートムービー『太一のモノログ』を創ろう。	1
2 「わたしの問い」を解決しながら、「太一のモノログ」を創る。	○ 複数の叙述と関連付けたり、心情を表す語彙を問い直したりして「わたしの問い」を発展させている子どもを価値づけ、身に付ける力につながる問いを共有していく。 ○ 全体で話し合った「教材内容」だけでなく、「～ということは」「…とつなげると」など、どの言葉に着目し、どのように考えたかを共有していくことで、一人一人が言葉による見方・考え方を働かせて問いを解決できるようにする。	本時 $\frac{5}{6}$
3 単元の学習を振り返る。	○ 互いの構成メモやショートムービーを見合い、各班がどのような場面設定や人物像と関連付け、どのように物語の全体像を捉えたかを価値づけていく。 ○ 立松和平の「いのちシリーズ」を活用した評価問題に取り組み、物語の全体像を捉える力について見取る。	1

5 本時の学習

(1) 目標

山場での太一の言動をモノローグの冒頭でどう表現するか話し合う活動を通して、物語の全体像を捉え直し、「語り出しの言葉」や「太一の心情を表す言葉」を見直すことができる。

(2) 展開

時間	学習活動	子どもの思い・姿
5	1 前時の振り返りをもとに、本時の課題をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前は「太一と瀬の主」の場面について、「わたしの問い」を解決していったけど、僕は、太一が「本当の一人前の漁師になれない」と思ったのに、なぜもりを下ろしたのかが分からなかった。 ○ 与吉じいさから村一番と認められても、太一はまだ自分は一人前ではないと思っていたのかな。 ○ だったら、太一はどんな漁師を「本当の一人前の漁師」と考えていたんだろう。
20	2 山場での太一の言動をモノローグの語り出しでどう表現するか話し合う	<ul style="list-style-type: none"> ○ おとうみたいに大物をしとめても自慢せず「海のめぐみ」と言える漁師だと思うな。 ○ 与吉じいさの影響も強いと思う。じいさのもとで修行する中で学んだ「千びきに一びき」の教えを守りながら、海とともに生きていく漁師を「本当の一人前」と思っているんじゃないかな。 ○ でも太一は瀬の主を取りたいと思っているでしょ。じいさとは考え方が違うんじゃない？ ○ ちょっと待って。「とらなければ」だから、太一はとりたかったわけではないんじゃない？ ○ 太一はずっと死んだ父の背中を追いかけて、父を破った瀬の主をとらなければ一人前になれないと思っていたけど、「千びきに一びき」の教えが分かっているからこそ殺したくはなかった。だから「泣きそうになりながら」だったんだね。
15	3 話し合ったことを基に、自分たちの「語り出しの言葉」や「太一の心情を表す言葉」を見直す。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「殺したい→殺さない」へと変わったことが太一の成長だと思っていたけど、そうではなさそうだね。だとしたら、太一の何が変わったんだろう。 ○ 「本当の一人前の漁師」の捉え方が変わったんじゃないかな。「大魚はこの海の命だと思えた」には「自分が瀬の主をとることは、海の命全体をとろうとしていることと同じ」ということじゃないかな。この時太一は本当の意味で与吉じいさの教えを体現できる漁師、海とともに生きる漁師になれたんだと思う。
5	4 本時の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今日は、「とらなければ」という言葉に着目し、相互関係と関連付けて考えることで、太一の考え方の変化について考え直すことができた。次は、その内容も含めてモノローグを完成させたい。



前時までに、太一が瀬の主を打たなかった場面について、一人一人が「わたしの問い」を立て、その解決に取り組んできています。本時では、その中で「村一番の漁師」と「本当の一人前の漁師」という言葉に立ち止まっている子どもを取り上げ、その違いを考えていく中で、中心人物の考え方がどのように変容したのかを捉えていく視点を見いだしていきます。

主体的・対話的で深い学びを生み出すための教師の支援（発問・指示，教材・教具，評価）

- 単元の学習課題を確かめ、前時までに『太一のモノログ』の冒頭「これは～の物語だ」をどんな言葉で表現していたか、その言葉と登場人物の相互関係や心情の変化をどのように関連付けていたかを振り返らせる。
- 太一が瀬の主を打たなかったことに着目して全体像を考えようとしているものの、それを冒頭の言葉でどのように表現するかで悩んでいる子どもを数人取り上げ、次のような課題を設定する。

瀬の主を打たなかったことは、太一にとってどんな意味があるのだろう。

- 自分が解決してきた「わたしの問い」とつなげて考えるように促し、これまで着目してきたおとうや与吉じいさの言動、そこから読み取れる人物像と関連付けて考えられるようにする。
- 「村一番の漁師」「一人前の漁師」が出てくる次の叙述を板書で示し、それぞれの言葉が意味する漁師像の違いについて問うことで、前後の叙述を再度読み直すことを促し、太一の考え方の変化について考えられるようにする。

【教材・教具】

- 『太一のモノログ』の構成メモ

- ・「自分では気づかないだろうが、おまえは村一番の漁師だよ。」(P.204,L9)
- ・これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚、村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主なのかもしれない。(P.209,L10)
- ・この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。(P.210,L9)
- ・太一は村一番の漁師であり続けた。(P.211,L8)

- 「太一にとって『本当の一人前の漁師』は…だった。けど～」のように、太一の「本当の一人前の漁師」に対する捉え方の変化を読んでいる発言を取り上げ、前後の言葉を比較したり関連付けたりして、中心人物の考え方の変化を捉える思考操作を価値づける。
- 全体で話し合う中で見いだした「前後の言葉の意味を比較・関連付けして中心人物の考え方の変化を捉える」という考え方を基に、それぞれのグループの『太一のモノログ』を見直すように促す。
- 話し合ったことを基に、太一がどのように語るかを想像し、構成メモに加筆・修正をさせていく。
- 単元の学習課題に立ち返らせ、自分がどの言葉に着目して登場人物の相互関係や心情の変化を捉え直したかを振り返るように促すことで、一人一人が言葉への自覚を高められるようにする。
- 振り返ったことを「国語の記録」として記述させるとともに、発展した問いがあればノートに書き留めておくようにし、学習課題解決に粘り強く取り組む姿を見取っていく。

【評価】

中心人物の考え方の変化を視点として物語の全体像を捉え直し、『太一のモノログ』を見直すことができる。

(ワークシート，観察)